

と、いろいろなことが振り子のように去来した。罪深い「戦争」と、得難い「平和」である。五十七年経った今、「平和ボケ」という言葉を聞くようになった。日本が平和な証拠だという人もいる。しかし、平和への願いは、百年経っても五百年経っても薄らぐようなことがあつてはならない。大きな犠牲を払って、「もう戦争は起こすまい」と何回も誓った日本である。これを、子々孫々まで伝える責任を強く感じている。

私は今五人の孫にも恵まれて、まことに果報者と思つている。かつて敗戦で勝ち取った「自由」が勝手気ままな利己主義に陥らないように、若い人たちに「責任ある自由」の尊さを根気よく、優しく導いていかなければと思つている。

思い出「子どもでよかつた」

長野県 矢口寿子

私の父、矢口弁太郎は、国策移民として拓務省、陸軍省、関東軍の指導により、東十一県下の在郷軍人より選抜された第一次武装移民団の一員として、昭和七（一九三二）年十月に渡満し、十月中旬に佳木斯ヂャムスに着いたが、その間にも随分と苦勞をしたそうです。ひと冬を佳木斯で過ごし、翌年二月に三江省樺川県永豊鎮に先遣隊の一員として入植し、本隊受入れの準備作業に従事し、ここでも匪族の襲撃も、再三ならず遭つて、五十人以上の犠牲者が出るような苦勞だったそうです。昭和八年三月十日の陸軍記念日の日に、弥栄村イヤサカムラ開拓国と改称し、翌年十月に家族招致となり、長野県からも開拓花嫁二十人が弥栄村に嫁入し、そのうちの一人が私の母です。

それから昭和二十年の八月までは、苦勞の中にも平和な日々が過ぎて、昭和十一年一月一日に私、寿子が生まれ、次々に妹弟ができて、妹二人、弟一人、計六人家族の我が家でした。だが、その平和な生活が一転し、悲劇の門出となったのが八月十二日です。今から五十七年前の八月十二日、私は九歳になっていました。

早朝、人の気配に目を覚ますと、母がランプをつけ呆然と私たち四人の子供の寝顔を見つめていたことを覚えています。「どうしよう……」母の一言が今も鮮明によみがえります。「母ちゃんどうしたの」目をこすりながら聞く私に、「今知らせがあつてな、この家を出なければならぬだ」と、母は小声で答えました。ふと見ますと、母がまとめた荷物が寝間の隅の暗がり息を潜めるように置いてありました。一方で何も知らぬ弟妹たちは、幸せそうな寝顔をしていました。あとで聞いた話では、一週間分の食料を携帯し、行けるところまで行き、日本へ帰ることができないならば

一緒に死ぬのだという悲壮な連絡だったそうです。父は現地召集を受け、母子で日の丸を振って送り出したばかりでした。今考えれば、父と長い間離ればなれになるとは夢にも思いませんでした。

リュック一つを背負った女、年寄り、子供ばかりの一行が馬車に乗っていました。それぞれの心の内にあったのは、住み慣れた故郷に再び帰ることができるとのことでした。馬車は駅に急ぎました。私は幼い弟を負い、二人の妹は夢中で母にしがみついています。途中、佳木斯の街は爆撃に遭い燃えていましたが、運良く駅で無蓋車に乗り込むことができました。一息つくうとしたら急に雨が降り出し、ずぶ濡れになった背中で、弟はすやすや眠っていました。

列車が駅に入りますと、車上の私たちに兵隊さんが乾パンを投げてくださいました。

車中で亡くなった幼子は、鉄橋通過中に投げ捨てられ、停車時間が長ければソ連兵が中国人を使

い列車に乗り込み、万年筆や時計など欲しさにおどかす大声が恐怖を助長していました。私たちは、ロシア語を話せる先生が偶然一緒だったことで難を逃れることができました。列車が走り出しても皆は身を堅くして、息を殺していました。時折響く乳飲み子の泣き声が、いやに大きく感じました。

長い道のりの末、綏化スヰホアの飛行場の格納庫に落ち着きました。最後に現地召集された人たちが解除になり、ここへ合流していました。

ある日、外に出ていた大人や子供が急ぎ足で格納庫に入って来たのです。それぞれに座り、手をつき頭を垂れ始めました。私も皆に倣って同じ姿勢になりますと、コツコツと軍靴の音が聞こえてきました。私の前を揺れながら通り過ぎる銃の先が印象的でした。この格納庫生活の一カ月の間、毎日のように白木の墓標が増え続けました。そして、九月四日、私の背中でここまで逃げて来た弟が、一歳七カ月の生涯を閉じました。真新しい白

木の墓標をじっと見つめる母の寂しい横顔が、今でも鮮明によみがえります。

次の収容先は、大連の実業学校でした。長蛇の列の中で、四歳の末妹は泣きながら母に手を引かれていました。私は弟が亡くなっていましたので、背中が軽くなって、七歳の次妹と手をつなぎ歩きました。移動するたびに子供がいなくなって親が半狂乱になったり、おじいさんが病気のおばあさんを背負って歩く姿もありました。

実業学校での生活が長くなりますと、共同生活だった私たちは、各家庭毎の生活になり始めました。そのうち健康な人は働きに出掛けるようになりました。母は、洗濯や掃除の仕事を見つけてきました。私は通いで子守に行くことになりました。母親が女の子の出産後亡くなったそうです。残されたのはその乳飲み子と三歳になる男の子でした。私は、もらい乳のために一日二回くらい、そこら中を連れ歩き回りました。その父親は会社員で、とても優しい人でした。たまにお菓子をお

土産に買ってきてくださり、その男の子と食べました。一日につき十円をもらいました。母に渡しますと、そのお金を押し頂いて喜んでくれました。そんな日々も長くは続かず、社宅をその一家は引越すことになりました。別れの日、三歳になる男の子は私になついていたのでしょうか、つないだ私の手をいつまでも離そうとはしませんでした。後で聞いた話ですが、まもなくその男の子は亡くなったそうです。

ある日のことです。この実業学校に長野県の松川村の出身者がいると聞いて、私たちを訪ねてくれた人がいました。小林さんという方でした。母は、小林さんのお世話でお茶くみ、掃除の仕事を世話してもらいました。その仕事の帰りに薪をもらいに行つて、高梁コウリヤンの赤い皮を廊下のコンクリートでこすつて炊いたことを、おぼろげながら覚えていきます。

栄養失調で毎日のように人が亡くなりました。母も疲労が重なり、肋膜炎にかかり倒れてしまい

ました。母は、病人ばかりがいる下の部屋で寝るようになりました。病人に対しては、少しばかりよけいに食べ物があったように思います。末の妹は母が食わずに残しておいてくれるのを楽しみにして、下の部屋に降りて行つてはニコニコした顔で階段を上がつて来ました。しかしその妹も病気になる、動けなくなりました。

随分日が経つたある夜中のことです。隣組だった菅沢さんが兵隊から帰つて来ました。そこに居合わせた皆で手を叩いて喜び合いました。「父ちゃんもきつと帰ってくる」そう心の中でつぶやきました。

母は、周囲の人たちの励ましによって起き上がることができました。特に菅沢さんの「こんなところで寝ていて子どもをどうするんだ！」の一言は大きかったようです。一緒に寝ていたほとんどの人は亡くなっていました。母は何人もの人に末期の水をあげたと言っていました。母は暇がある」と私たちを呼び、頭の虱シラミをとってくれました。つ

ぶされるとき痛かったのを覚えていません。私たちばかりでなく、親が亡くなっていた女の子の風もとっていました。

当時私は、その女の子は迷惑だろうなと思っていました。それから間もなく、また小林さんが訪ねて来てくださいました。今度は住み込みで子守に行かないかと言われ、電車で連れて行かれたのは山崎さんというお宅でした。はじめは急な話だったのと、遠くだということで心細く寂しく思いました。山崎さんのお宅で私を待っていたのは、五歳を頭に三歳、一歳の男の子ばかり三人のきかん坊でした。実は私の前の子守は、この三人に手を焼きとても勤まらないと辞めたので、私におはちが回ってきたとのことでした。しかし子供たちは、私の言うことを素直に聞いてくれました。

引揚船が来るとのことで、住み込みの家まで母が迎えに来てくれました。そのときの嬉しさは今でも忘れられません。別れるとき山崎さんからは

お金が無いからということ、何か物ももらったような気がします。その足で小林さんのお宅へ、引揚船に乗ることができるようになったと挨拶に伺いました。お昼に白いご飯をご馳走になりました。小林さんには、今でも感謝しております。

港に滞在して、引揚船に乗れるまでの日数を毎日折り返えしました。出港が決まった日のことです。ものすごい人数の列の中に私たち一家はいました。私は、虫の息の妹を負ぶって、おぼつかない足取りでよたよたと乗船しました。ぐったりしている妹はとても重たく感じましたが、翌日の早朝に妹は息を引き取りました。菅沢さんらに手伝ってもらって、妹をシートにぐるみ埋葬しました。船は悲しみを乗せたまま佐世保港に入港しました。そこで白米のご飯と取れたての鯛が生まれ、美味しく食べたことを覚えていきます。白いご飯が食べたいと言っていた妹に、一口でも食べさせてあげたかったと思いました。同じ船に乗り合わせた人の中には、日本の土を踏んで安心したの

か、子供一人を残したまま亡くなった方もいました。「あー、もうひとがんばりだったのに」という声が、嗚咽と共に周りから聞こえてきました。

両親を大連で亡くし、隣組の人に連れられて乗船した五歳ぐらいの男の子が私の傍らに横たわり、小さな声で「お水ちょうだい」と言ったきり息を引き取りました。母は栄養失調で目が悪くなり、字もまともに書けなくなっていましたから、佐世保に着いたことを実家に連絡するはがきは菅沢さんが代筆してくれ、投函しました。

同じ引揚船で引き揚げた一行の人数は、半分以下まで減っていました。佐世保駅でそれぞれの地方毎に別れて列車に乗り、郷里に向かうことになりました。私たちは、昭和二十一年十二月にやっと長野に着きました。長野駅で降りた人たちは、そろって善光寺にお参りし、再び駅に戻ったときのことでした。父が私たちを待っていたのです。ちょうど開拓の用件で県庁に行った帰りだったそうです。でも、私たちは栄養失調で視力が衰えて

いたために、父の顔がただぼんやりとしか見えなかったこともあってか不思議と涙も出ず、思ったほど感激的な再会ではありませんでした。後になって、もっと早く会えたらよかったのにと思っていたいくつもの場面が、走馬燈のように浮かんできました。

父の帰郷は、私たちより一年以上も早い昭和二十年十月だったそうです。帰郷したとき父の実家のある池田町ではなく、母の実家の松川村に行つて、私たちの消息を尋ねたそうです。それがちょうど秋の稲刈りの真っ最中で、人手が足りなくて困っているときだったので手伝いをさせられたとのこと、自分の家に帰るのが遅くなり、総領の兄にこっぴどくしかられたそうです。父は村の間と共に、松川村に流れる高瀬川の原野を田圃にしようとして、松の根を掘り起こし転がっている石ころなどを捨てる一方、川向こうの数キロメートル離れたところの粘土をトロッコを使って客土するなどしながら、合間を見ては母の実家へ足を運

び、消息を確認しながら私たちの帰りを待っていたそうです。

父と一緒に母の実家に向かいましたが、その年の長野は例年以上に雪の多い年で、そんな深い雪の中を歩く私たちの格好といえ、着物は佳木斯から逃げ出して来たままのものでぼろぼろでしたし、履き物は穴のあいた運動靴というみずぼらしい格好ですから、通りの家の前で雪かきをしている地元の人たちはこんな私たちを好奇の目で見ていました。そんな冷たい目にさらされながら、一時間あまりで母の実家に着きました。母は十三年ぶりに実家の戸口に立って、両親と涙ながらに再会の言葉を交わしたあと、仏壇の前で先祖様の手を合わせました。そこには、菅沢さんに代筆してもらった佐世保からのはがきが置いてありました。

これからが松川村での生活です。しかし、故郷に帰って来たからといって、決して平坦な生活ではありませんでした。まず栄養失調で病んだ目を

治すために、松本市の親戚の家に泊めてもらい、眼科医院に通いました。そのうちに、随分視力を取り戻すことができましたので、昭和二十二年四月に松川小学校に入学することができました。その二年後でしたか、大連でお世話になった小林さんが家族で引き揚げて来られたことを知り、母とお礼かたがた採れた野菜を手土産にして挨拶に行ってきた。

「長野県開拓団四十周年記念誌」を見ますと、昭和二十一年四月に出された農林省令緊急開拓五カ年計画に基づき、県の外郭団体として開拓増産隊が発足し、その本部がこの北安曇郡松川村東松川に設置されました。集まった隊員二百五十人に対して開拓訓練を実施したそうです。同年六月、開拓増産隊は県下十三の支隊に分遣され、それぞれの地で開拓訓練が継続されたそうです。北安曇支隊については、「矢口弁太郎（私の父）以下七人が同年十二月東原帰農組合を結成」と記されています。父は度々長野県庁で行われる会議に出

席したようです。その会議の帰り、長野駅で私たちと再会を果たしたのです。

昭和二十二年でしたか、天皇陛下が開拓の様子を視察されました。このときは、歓迎のため陛下がお通りになる道や学校の前に大人も子供も並びました。父もその中においてお迎えしましたが、陛下から「開拓は困難でしょう」とお言葉をいただきましたが、ただ緊張するばかりで「はい、頑張ります」とお応えするのが精いっぱいだったそうです。

私たちは、一年以上母の実家に世話になっていましたが、昭和二十四年に実家からお金を借りて家を建てました。周囲は松やアカシアの生い茂った中にぼつんと建った寂しい一軒家でした。電気も井戸もなく、ランプともらい水の生活でしたが、父と一緒に生活だったことで辛さも苦になりませんでした。お風呂は高瀬川の対岸、池田町にある銭湯に行きました。冬になると橋の上では寒風が私の髪とタオルをカチカチに凍らせました。

そんなときには、自分の家にお風呂があったらなと思いました。そのうちに、隣に家を建てた方がドラム缶を手に入れて風呂を作られましたので、そこでもらい湯をすることができました。数カ月後、やっと電気を引くことができ、明るく灯った裸電球の下で、妹と一緒にいつまでも眺めていたことを覚えています。最後まで残ったのは水の問題でした。これも父たちが自分でせっせと掘りまわした。掘りあがった井戸から、透き通った水が出てきたときには、みんなで万歳と叫びました。

「ああ、これからは重い水桶を毎日担ぐこともいらない。思いっきり水が飲める。もちろんただで、好きなだけ飲める」そんなことを胸の内でも叫んでいました。

中学を卒業しましたが、まだ家の収入は安定していませんでしたので、家計を助ける目的で愛知県知多市にある織布工場への集団就職に加わりました。

出発の日、早朝にもかかわらず、母はもろろん

叔母までが、信濃松川駅のホームまで見送りに来てくれました。父は寝ていて見送りには来てくれませんが、昨夜言われた「誘惑に負けるな」の一言を胸に抱いて、私は車上の人になりました。父は寂しかったのだと思います。私も辛い気持ちでした。やっと一緒に暮らし始めた家族と、離ればなれにならないのでしようか、割り切れない気持ちのまま信州をあとにしました。知多に着いてすぐ、同じ満州から引き揚げて来た友達の降旗照子さんにその思いを手紙に綴りました。その返事がきたとき、恥ずかしく思いました。「寿ちゃん、昔の人は『可愛い子には旅をさせろ』と言ったじゃない。私なんか、病気でどこへも行けないのよ。貴方の方がよっぽど幸せよ……」

その照子さんは、肺を患い二十九歳の若さで亡くなってしまいました。ご両親の一人娘を失われた悲しみはいかばかりでしょうか、「親より先に死ぬのは親不幸だ」と、涙をぬぐうことも忘れ

て、そうつぶやいておいででした。私は両親から丈夫な体をいただいたのです。ならば頑張って働き、一円でも多く家に送金したいと思いました。そして、毎日汗だくになって働きました。でも、その汗は頑張ったからばかりではなく、本当に暑いのです。

ある日、中学校の恩師が工場に見学に見えたときのことでした。「矢口さん、こんな暑いところでよく頑張っているね、感心したよ」と、先生は額から噴き出る汗をハンカチで拭きながらおっしゃったのを覚えています。工場では、糸が切れないように常に蒸気を出して、高い湿度を保たなければならぬのです。つまり、蒸し風呂状態です。服を脱いで、そのまま絞れば水滴がしたり落ちてくる程です。朝食は、外米と私の口には塩辛いみそ汁だけでした。塩辛いお陰でおかずはいりませんでした。食べさせてもらえるだけ有り難いと思えました。そのうえ、母の実家からみそ漬、スルメなど送ってもらいました。もちろん、

母からも、餅やあられ、炒り豆など送ってもらいました。

母の小包の中には、決まって一言添えてありました。「体には気をつけてね。父ちゃんも、皆も元気で頑張っているから」そんな手紙が私を何よりも力づけてくれました。それに応え、私は家へ仕送りしました。あるとき五千円送金したら、父は齒の治療ができてとても感謝していた旨を、母からの小包に添えてあった例の「ひとこと」で知りました。私は引き揚げたあとの内地で生まれた末の妹が小学校に入学したときは、ランドセル、セーラー服、靴などを送りました。そのときも、父から「助かった」と簡単な便りがありました。私はその手紙を読んだとき喜んでいる父の気持ちがよく分かって、少しは親孝行できたのかなと思いました。

私は、両親に心配を掛けないように元気で働いているとき、少しでも手が空けば手紙を書きました。しかし赤痢にかかり入院したときはあえて知

らせませんでした。それは私なりに親孝行だと思っていたからです。しかし、あとになって両親に知られ、叱られました。

工場での楽しみの一つは盆踊りでした。踊りは先輩から指導を受けました。次の年は私たちが、後輩に教えることになる訳で少し緊張しましたが、嬉しかったのは工場から勤続年数に応じて一反、二反と反物が支給され、母が浴衣に仕立ててくれたことでした。

年末、お正月休みということで、初めて帰省ができます。安曇野に帰ることができると思いますと、その日が待ち遠しくて、買っておいたお土産を何日も前からトランクから出したり入れたりしておおはしゃぎしました。

そして帰省の当日です。どこから涌いてきたのかと思う程、名古屋駅の構内は人でごった返していました。きれいなよそ行きの服を着た人、山登りの大きなリュックを背負った人、自分の体よりも大きなリュックを背負った人など、いろいろな人

がいました。列車に乗りますと座席は満員でした。私は新聞紙を通路に敷いて座り、4時間以上揺られてやっとのことで松本駅に到着しました。

ホームに降りますと、懐かしい信州の冷気が頬を撫でました。その冷気も私にとっては優しくさえ感じました。大糸線に乗り換え北松本駅に近づくにつれて、胸の高鳴りを覚えました。ホームには母の姿がありました。私は駆け寄り、息を弾ませながら言いました。「迎えに来てくれたんだね」気が付くと、母の傍らには友達のお母さんも一緒にいました。その友達は一と列車遅れたのでしょうか、一緒ではありませんでした。何か申し訳ないような気がしました。

その後、盆暮れに帰省するようになったのですが、仕事をやりくりして、二、三時間くらいしか眠らないで仕事を済ませることもありました。そのころの給料はどうかといえますと、初任給は二千三百円くらいでした。仕事に慣れてきますと、日給月給制になって残業も増え、一度だけでした

が一万円に手が届いたこともありました。ただ、それも長くは続きませんでした。残業は減っていき、しまいには残業が禁止になってしまい、給料が減っていった貯金もできなくなってしまいました。

昭和三十一年九月の末、父から工場に手紙を出してもらい、退職しました。別れの日、部屋の友達や、新卒で入ってきた後輩たちが駅まで送ってくれ、「お姉さんが帰ってしまおう」と言って泣いていました。私もその子たちの手をぎゅっと握り返し、「頑張ってたね」というのが精いっぱいでした。私にも泣いてくれる人がいるのかと、切ない反面嬉しい気持ちもありました。

私の松川村での生活が再び始まりました。その始まりは氏神様のお祭りでした。私が帰って来たというので母の実家に呼ばれ、歓迎会をしてくださいました。ご馳走を前に、五年ぶりの再会に感謝と感激で涙の出る思いでした。

翌日からは母も私も、母の実家の田圃で金色に

実った稲との格闘でした。母の実家は専業農家で耕作面積が広いうえに、当時の稲刈りは全くの人力ですから、稲刈りには近所の非農家の方や開拓の人など沢山の人も参加して、朝早くから夜遅くまで刈っては束ね、刈っては束ねての繰り返しでした。刈り終わると、はぜ掛けをして脱穀、そして粃もみずりです。脱穀は夜の仕事でした。その後、機械が導入されるまではこの状態が続きました。

昭和三十三年八月のお盆休みに、私の家で同窓会を開催することにしました。早朝、一番初めに顔を見せた人に驚きました。茨城県からはるぼるやって来た吉川さんでした。そのうちに長沼さん、矢ヶ崎さん、中野さん、紀子さん、原田さんらの懐かしい顔が揃いました。何も大層なおもてなしはできませんでしたが、家族みんなで心づくしの歓迎をしました。その夜、長沼さんが「勘太郎月夜」を歌ってくれました。それを聞いた父は、「うまいもんだ。みんな立派になったな」と感激し、目を潤ませていました。みんなは二泊

したあと帰って行きました。信濃松川駅まで私が見送ることになりました。また、いつ会えるのかとふと思ひ、一人寂しく歩いて帰った覚えがあります。

昭和二十四年まで、耕地は共同経営という形でした。翌二十五年からは個人経営となりました。それから十年あまりで、第一工区の開墾計画の大半が終了しました。そんな中、私は昭和三十四年に結婚しました。しかし、まだ我が家では機械化ができず、手作業でがんばっていました。冬は米俵作りに明け暮れました。手は冷たさにひび割れ、わらに指が触れるだけで痛みが走りました。でも、我が家の供出分だけとはがんばりました。その翌年の六月、出産しました。田植えの時期はもう大きなお腹を抱えていました。二日間、人手も借りて一町二反作付けしました。そして除草作業が大変です。もう臨月なので、這うようにながら出産の前日まで草を取っていました。

まだ我が家の農地は基盤整備を始めたばかり

で、生産性も上がらない状況でした。生活面では水道の必要性が日ごとに高まってきました。しかし、水道設備には多大の資金を要します。そこで、どうしても県からの借入金や助成金に頼らざるを得ませんでした。その陳情のために、組合の役員はたびたび県庁へ出張をしました。そのお陰で、資金面は目処をつけることができました。さて、これからが大変でした。一戸当たり二十メートルの穴掘りが科せられたからです。この土地は前述の通り石だらけの不毛の原野だったので、何度も大きな石にぶち当たり、前に掘り進めない日さえありました。

それから十年程経った昭和四十七年、国・県の方針に基づいて、信濃松川開拓事業協同組合は所期の目的を達成したとして発展的解散をし、一般農政へと移管していきました。戦後二十有余年の開拓事業に終わりを告げるときがきたのです。そのころには、もう二世の時代になりつつありました。昭和四十四年に、やっとの思いで家を新築し

た矢先、父が脳血栓で倒れてしまいました。幸い命には別状ありませんでしたが、後遺症が残り、農作業は私と夫が中心になっていきました。そして、遅ればせながら稲刈り機をはじめとした農業機械も導入しました。しかし巷では戦後の食糧不足の時代から一転して食糧過剰の時代になっていました。そのため米の生産調整が叫ばれ、減反政策が実施されるようになってきました。これは農家にとって大きな衝撃でした。農業所得はこの影響を受けて激減しました。機械化を図ったのは生産の向上によって収入の増加を見込んでのことでしたから、生産の量を抑えられては専業農家の所得が減り生活が苦しくなっていくのは当然のことでした。減った所得を補うには、農業外収入を得る以外道はありませんでした。若者たちは、会社や工場へ勤めるようになりました。農作業に専従するのは老人と女性だけになってしまいました。産業構造の変化により地価の上昇を招き、農地の転売が続きました。我が家でも、農地の一角

を工場の駐車場として貸し出すことになりました。
た。

昭和五十七年、徳島にお住まいの新見先生から
ご夫妻の金婚式への招待状が届きました。長沼さ
んの運転で、前島さん、矢ヶ崎さん、吉川さん、
菅沢さん、赤羽さん、宮田さん、そして私を合
せた八人の同級生が出席できました。その道中は
同窓会でした。その楽しかったこと、今でも思い
出すと頬がゆるみます。その翌年、金婚式参加者
全員の家族ぐるみで、先生ご夫妻を信州へお招き
し大歓迎申し上げ、私の家にも一泊して頂きまし
た。その夜は当時の様子を語り合いましたが、み
んなの顔は泣き笑い、でくしゃくしゃになりました。
昭和六十年の二月には長女が結婚し、現在男の
子三人の孫がいます。そのひ孫を見ぬうちに、父
は昭和六十一年十一月二日に心筋梗塞によって七
十七年の生涯を閉じました。初ひ孫の誕生は父が
亡くなった二カ月後の一月十七日でした。父の一

生は昭和七年満州の開拓に入り、生活も安定し始
めた矢先に徴兵で入隊し、その後内地に戻り、荒
れた河川敷を開墾するという苦勞の連続でした。
戦後信州へ帰って来たばかりのころ、私はまだ子
供でしたが、トロッコで田に客土する作業中、乗
り損ねて足に怪我をして寝ている父を見た以外、
太陽が昇っている間、布団の中にいるのを見た覚
えがありませんでした。その父が六十二歳のとき
に脳血栓で倒れたのです。それも、やっと生活が
安定し、好きなお酒も飲めるようになったところで
した。開拓の役員、村や地域でも役員や氏子の役
員などを務め、貢献した父です。働きづめの父で
した。そんな父でしたからこそ、その後一カ月の
療養で起き上がることができ、自分のことは自分
でできるまでに回復しました。その闘病生活も十
五年、七十七歳で生涯を閉じた父が不憫でなりま
せん。仏壇に手を合わせ、ここまでやってもらっ
たことに感謝するばかりです。今年で十七年目
になりますので、法要をしたいと思います。

平成四（一九九二）年、食糧庁の長野食糧事務所の大町支所に勤務していました主人が定年退職しましたので、その年に記念旅行ということで、

ヨーロッパ四カ国のパッケージツアーに娘夫婦が申し込んでくれました。母が元気でしたので、田植えを終えたあとの六月、思い切って十日間の旅に出掛けました。初めての海外旅行に緊張していた私たちに、同じツアーの参加者で気さくに話しかけてくださったのが北海道庁勤務の成田精祐さん夫妻でした。成田さんご夫妻は、海外旅行が二度目ということいろいろとお世話になりました。そのお返しの気持もあって、持参した日本酒、梅干し、お茶をお分けしましたら大変感激されました。今でもおつきあいが続いております。信州へ訪ねて来てくださったたり、私たちも北海道へパッケージツアーに行った際にお会いしたりしました。

このように、楽しい旅ができるのも、周囲の人たち、両親がいてくれたからです。そう思います

と感謝の気持ちを込めて仏壇に手を合わせてしています。また、海外旅行の思い出を作ってくれた主人にも感謝したいと思います。

最近、思うことがあります。「数多くの犠牲者を出した事実を決して忘れてはなりません。戦後五十七年を経た今、過去を振り返り、満州の地に眠っている犠牲者の霊に対し、心から冥福を祈りたい」ということです。

そんな思いが募っていたときに、平成十一年に「弥栄会友好訪中追悼の旅」が行われることになりましたのに、母が病気だったこともあって参加できなかったことは残念でたまりませんでした。そのとき、私が追悼の旅に行けないことを知った赤羽紀子さんが我が家を尋ねてくださって「寿ちゃん、もしよかったら私が一緒に法要をしてもらうから」といって、妹と弟の卒塔婆を持って行ってくださいました。そして緩化で弟の、大連で妹の法要をくださったとのこと。団員の皆さまに感謝致します。ありがとうございます

た。

それから、毎年九月に行われます穂高町にある殉国塔での慰霊祭には、欠かさず出席させてもらっています。藤巻会長、坂本先生をお迎えして、一世・二世・三世の皆さんと会い、お話することが何よりも楽しみなのです。

母は八十八歳になりました。今では介護が必要な状態で、週二回のデイサービスのお迎えが来てくれます。私も六十六歳になった途端腰痛に悩まされながらも、孫たちに囲まれて毎日を楽しく過ごしています。趣味の大正琴では、平成十年四月に全国大会が日本武道館で行われ、NHKで放送されたドラマの主題歌「夫婦みち」を百十人で演奏しました。

人は歳月を重ねるうちに苦しい過去を忘れようと思しますが、記憶を心から消し去ることはできません。親になってみて、「あのとき九歳でよかった」と思い、二度とあの苦しみを味わうことがないことを願ってペンを置きます。

満州引揚げ体験記

福井県 能登谷 英雄

私は、二十六歳になった昭和七（一九三二）年十二月初旬、本願寺の海外布教使に任命され、昭和十一年の秋、布教のために大連に渡った。ついで元満州吉林省敦化の東本願寺布教所に転任したが、昭和二十年四月召集を受けて、間島省延吉市一〇三二八部隊に入隊した。部隊はその後、ソ満国境に移動したが、その地で終戦を迎え、昭和二十一年秋に郷里福井県に引き揚げた。

その間の十五年の歳月は、過ぎてみれば夢のようにただ一瞬のことだが、私にとっては決して平坦な道ではなかった。つい昨日の出来事のように思い出されるのであるが、布教のために市街地から離れた開拓団を巡回したときには、幾度となく猛獣の咆哮（ぼうこう）を聞き、もしや襲われるのではないか